

論文

「ありのままでよい」ものというルソーの子ども観をめぐる試論

Nature is Good: An Introductory Study of J.-J. Rousseau's View of Childhood

岡野亜希子¹⁾

Akiko Okano

■Abstract

We usually assume that children are natural, innocent, and good. But why is that? In this paper, we will read the texts of Jean-Jacques Rousseau, which modern and contemporary education has used as an ideological prop, as well as several texts on communication that draw on them. Finally, we present the problem that Rousseau's view of the Childhood as "nature is good" and its problems.

キーワード：ジャン=ジャック・ルソー、子ども期、自然、儀礼、近代

Key Words: Jean-Jacques Rousseau, Childhood, Nature, Ritual, Modern

1. はじめに —近代的子ども観とルソー

フランスの社会史研究者であるフィリップ・アリエス Philippe Ariès は、『〈子供の誕生〉—アンシャンレジュールム期における子供と家族生活—』[1960 (1980)]において、中世から18世紀にかけて人々の生活に注目することで子どもや家族の心性 *mentalité* を描き出した。アリエスは、絵画や日記、墓碑銘などに登場する子どもの描写が、現在とは全く違うものであったことから、中世までの子どもはそれ自体固有の価値をもつものとしてではなく、単に小さな大人として扱われていたとみる。16・17世紀になると上流階級の中で子どもを「溺愛」する態度などが広がり、次第に、子どもは無垢でありそれゆえ保護と教育を必要とする存在とみるという新しい子ども観が広がっていく。大人とは異なる固有の価値を有するものとしての子ども期の発見は、その後、子どもを保護と教育の対象としながら将来的な市民社会の担い手とみなすという理念——近代的な自律的人間をいかに形成していくかという理念——を育みながら、19世紀以降には現実の制度の確立を促していく。そして、工場法による児童労働の制限や学校教育制度の整備など、近代国家による子どもの福祉や教育への関心・介入へと進んでいくことになる¹⁾。

このような近代的な子ども観の拡大を力強く支えたもののひとつにルソーの思想がある。教育論『エミール』の刊行は、教会による原罪を否定する人間観を示したことで当時の教養人たちに衝撃を与えた。ルソーは墮落して形骸化したパリのような都市社会の学術文化と対比させる形で、

子どもの本来的な無垢性、素朴で自然な善性を強調した。ルソーの思想はその後、多くの教育学研究者や教育実践家に読まれ、それを根拠とした子どもの教育可能性にもとづく教授・学習理論の基礎にもなっていく。

日本でも明治期以降、このような子ども観が広く受け入れられていく。ルソーの教育論をはじめルソーに影響を受けた教育思想家や教育実践家の活躍の様子や、このような子ども観をベースとした教授・学習理論が紹介されるなかで、彼らの成果をふまえた教育実践が新教育（大正自由教育）運動として、多くの学校で展開されていった。さらに、第2次世界大戦後の新しい学校教育制度のもとでも、このような子ども観は注目された。とくに旧体制を否定し子どもの新しい価値を見いだしたルソーの教育論は、戦後民主主義社会の担い手としての子ども、というイメージと、それを実現するための教育の探究へと結びつきながら論じられていった²⁾。

このように、近代以降の教育思想や教育学は、目指すべき人間像として自律的人間を想定してきたが、そこには、人間本来の自然な子どもが、人間社会の営みを頼りにしながら理性的な大人へと変容するという教育観がある。本論考では、近現代の教育言説や教育実践が思想的な支柱としてきたジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau (1712-1778) のテキストおよびそれをふまえたコミュニケーションに関するいくつかの論考を検討しながら、子どもや教育に対する上記のような人間観の背景を探ることとする。最後に、この人間（子ども）観の問題性を指摘することで、今後の研究への足掛かりとしたい。

1) 近畿大学産業理工学部 教養・基礎教育部門 准教授 aokano@fuk.kindai.ac.jp

2. 「透明と障害」の問題

ルソーは18世紀のフランスを中心に活躍したジュネーヴ出身の思想家・哲学者である。『社会契約論』[1762]などの著者として有名であるが、同年に教育論『エミール』[1762]も発表している。その冒頭では、子どもは生まれながらによいものであるという主張が、次のように述べられている。

万物をつくる者の手を離れるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。人間はある土地にほかの土地の産物を作らせたり、ある木に他の木の実をならせたりする。[……] 人間は見にくいもの、怪物を好む。なにひとつ自然が作ったままにしておかない。人間そのものさえそうだ。

[……] 偏見、権威、必然、实例、私たちを押さえつけている一切の社会制度がその人の自然をしめこらし、その代わりに何ももたらさないことになるだろう。自然は、たまたま道の真ん中に生えた小さな木のように通行人に踏みつけられて、間もなく枯れてしまうだろう。

[OCIV, 245(23)]

ルソーによれば、「万物をつくる者の手を離れるとき」、すなわち神の手から離れて人間社会に生を受けた子どもはすべて「よい**bien**」ものである。しかしながら、人間は子どもが本来的で自然な「よい」ものままでいることを許さない。人間の社会制度などがそれを妨げているためだ。だからルソーは、「若い植物が枯れないように、それを育て、水を注ぎなさい。[……] あなたの子どもの魂の周りに、早く垣根をめぐらせなさい」[OCIV, 245(24)] と言い、墮落した都市から子どもを遠ざけて、静かな田舎で教育を行おうとする。ここでは、子どもの善性が大人の手が入っていないもの、本来的なもの、「自然」と重ねられている。ルソーにとって子どもとは、人間が積極的に手を加える必要のない、ありのままのよい存在なのだ。

「ありのままのよい」ことへの言及や、墮落した都市と素朴な田舎の美德という対比は、『エミール』以前の著作にもたびたび登場する。たとえばすでに『学問芸術論』[1750]において、墮落した都市批判や田舎へのあこがれが、以下のようにはっきりと述べられている。

文明がわれわれの態度振る舞いを作り上げ、われわれの情念に気取った言葉を話すことを教えるまでは、われわれの習俗は粗野であったが、自然であった。そして態度の相違は一見のうちには人格の相違をあらわしていた。人間の本性は、事実、いまより善であったのではなく、

人間は容易に相手の心を知ることによって安心していた。こうした利点——もはやその価値はわからない——によって人間はさまざまな悪を免れていたのであった。[OCV, 89(16-17)]

『学問芸術論』は、1750年のディジョン・アカデミーの懸賞課題「学問と芸術の復興は、習俗の純化に寄与したか」に対して、ルソーが否の立場で応募し、当選した論文である。他の多くの投稿論文が、この課題に対して賛の立場をとったのに対し³、ルソーは、礼節が美德そのものとは信じられなくなった18世紀半ばのパリにおいて、学問と芸術による習俗への貢献に、次のような疑問の目を向けていく。

今日では、より精緻な研究とより洗練された趣味が、人を喜ばす方法を道徳の原理にしてしまい、われわれの習俗は悪しき、偽りの画一性に支配され、すべての精神は同一の鑄型に投げ込まれているように思われる。たえず礼節が要求し、行儀作法が命令している。たえず人々は慣習に従い、おのれ自身の精神にけっして従うことはない。人々はもはやありのままの自己をあえてあらわそうとはしない[……]。こうした不安は、なんとさまざまな悪を伴っていることだろうか。もはや誠実な友情も、真実の尊敬も、確固たる信頼もない。疑惑、不信、恐怖、冷淡、遠慮、憎悪、裏切りが、礼節という画一で偽りのヴェールの下に、そして現代の文明の成果であるあの誇らしげな都会ふうの優雅さのもとに、たえず隠されている。[OCV, 89 (16-17)]

ここでルソーが批判しているのは、当時の宮殿や都市における人びとの儀礼の在り方である。ルソーによれば、現代社会では誠実な友情や真実の尊敬は存在しない。なぜなら現代の文明の成果としての都会的な行儀作法、つまり「偽りのヴェール」によって不信や遠慮が隠されているからだ。『学問芸術論』では、田舎の素朴な暮らしが人間の自然な本性に重ねられており、その一方で都会風の洗練された礼儀作法は、人間本性に対する偽りや演技性の象徴であるとして、否定されていくことになる。

このような、「画一で偽りのヴェール」を介した二項対立図式は、先にみた『エミール』をはじめ、『学問芸術論』以降のルソーの著作に広く見られるものである。そこでは、内面と外面の一致への憧憬や渴望とともに、本音と建前が一致していない人々に対する不満や嘆き、あるべき自分を見ようとせず自分自身を装うことへの嫌悪感が表明されている。

ルソーは他者との偽りなき、内面と内面による交流を求めていたが、その実現は阻まれていた。フランスの哲学者ジャン・スタロバンスキー Jean Starobinski は、ルソーのテクストにたびたび登場するこのテーマを「透明と障害」と呼ぶ。スタロバンスキーによれば、ルソーにとって、お互いの魂が結ばれるような透明な交流を妨げているのは、外面的態度と心情の状態との間におかれた「ヴェール」という障害である。ルソーの主な著作は、「危機にさらされている透明性の保全と復元」という共通の目的のもとに書かれており、透明と障害の対立、透明性の希求と障害の克服が、ルソーの思想の核心である [Starobinski 24-25 (19-20)]⁴。

ここで提示された「透明と障害」というテーマは、『エミール』にも見いだすことができる。『エミール』では教訓や物語を使った「書物による教育」が批判され、子どもは書物からではなく「事物そのもの」の中から、自ら教訓を見つけ出すことの重要性が繰り返し強調されている [OCIV 369(202)]。そこでは、たとえば当時よく読まれていたラ・フォンテーヌ Jean de la Fontaine (1621-1695) の寓話集を使った教育が取り上げられている。この寓話は、擬人化された動物たちのやり取りから作られた短いエピソードで構成されており、最後に登場人物である動物たちが、それぞれのエピソードから得られる教訓を語って終わるものが多い。『エミール』では、この寓話集の芝居がかったセリフ回しや高尚な文体、動物の擬人化などが、子どもにウソを教えていると問題視されており、寓話から得られるはずの教訓が子どもの実生活に還元されることがいかに困難であるかが論じられている⁵。

ルソーにとって、寓話を読み聞かせ物語の中にある教訓を子どもに与えようとするのは「書物による教育」の典型である。というのも、「子どもにはなまの真実を語らなければならない」のであり、このようなやり方では「うそにだまされて子どもは真実をみそこなって」しまうからだ [OCIV 352 (173)]。「透明と障害」の問題と格闘するルソーにとって、文体を含めてメッセージを飾ることは、「事物そのもの」に下手な手を加えてそれを粗悪な写しとするだけであり、取り除かれるべき「ヴェール」であったのだ。

3. 「見知らぬ人たち」と儀礼

ルソーが「透明な交流」の実現にこだわったのはなぜか。「透明と障害」の問題の背景に迫るために、ここでは、アメリカの社会学者リチャード・セネット Richard Sennett の『公共性の喪失』(1976) を参照しながら、18世紀から19世紀にかけて大きく変化したロンドンやパリのようなヨーロッパの都市空間とそこに暮らす人々のコミュニケーションの在りようをたどってみたい。

セネットによれば、ルソーが過ごした頃のパリは、都市やそこに暮らす人々の儀礼の在り方が大きく変化した時期であった。17世紀から18世紀にかけて、ロンドンとパリの人口は増大したが、その人口増加の源は、近隣の都市部からではなく外部からの移住者たちであった⁶。それは大都市へ「幸運」な機会を求めて田舎を離れてきた人々であり、多くが20歳前後の若者であり、独身者であった。このような、ひとりで、過去の交際関係を断絶したうえで、遠方から都市にやってくる人たち——「見知らぬ人たち」[セネット、77]——の流れのうえに築かれた都が、当時のパリであった。

ではそれ以前の人々の社交はどのようなものだったのか。セネットによれば、「フランスばかりでなく、ドイツ、イタリア、イギリスの17世紀中期の宮廷では、地位の異なる人々のあいだでのあいさつは互いの個人関係についての知識に基づく念入りなお世辞を含んだものだった」[セネット、94]。もちろんお世辞を言われるのは上位の者である。まず人々は、お互いに、「私は……のような方に会えてうれしく存じます」というような言葉で「敬意を払い」合い、その次には、戦争での功績の数々、家族関係などの話が続き、ときには評判を得ている性格の長所について話す。つまり、その人のもっとも喜ぶことを述べることで、社会的な絆を確立する方法であった。宮廷が支配的な社会の構造——比較的小規模で、メンバーの同質性が高く、流動性が小さな、閉じたコミュニティ——においては、このような種類の挨拶やお世辞が容易に成立していた [セネット、94-96]。

しかし、70年後のロンドンとパリでは、そのパターンは変化した。セネットは、当時ロンドンの外交官を経験し、政治家でもあったフィリップ・チェスターフィールドが息子に宛てた社交への助言に注目した。「彼は息子への手紙の中で、世間で生き延びるために学ぶこととして、他の人に自分の感情を隠すことをもっぱら強調した」[セネット、96]として、この手紙の内容を検討している。たとえば、人に紹介されたときはその人の家族にむやみに言及してはならない。なぜなら、第三者からは、その人の家族間の感情的な関係について確かなことが言えないからだ。ほかにも、友人との付き合い方、宮廷での振る舞い方、自分よりも身分や立場が低い人への態度など、彼は繰り返し控え目であること、自分自身を抑えること、上品であること、礼儀を身につけること、威厳を保つことが重要であると強調する。「未知なものとしての他の人々に対する不安は、『私事は秘密にしてしすぎることはない』というチェスターフィールドの忠告のような意見を促した」のである [セネット、96]。

セネットが注目するのは、18世紀の都市社会で確立され

たこのような儀礼が、17世紀中期の宮廷社会の様式とは正反対となった点だ。「見知らぬ人たちが次から次へと補充される環境では、ゴシップは即座に分かり合える話題ではなくなり、その人とその人の知られている美点についてお世辞を述べるような挨拶は、次第に困難になっていった。代わりに人々は、「無差別にいかなる人に対しても用いることができ、また用いられた事実は、何らその丁寧さを損なうものではない」といような、「挨拶の決まり文句」を見つめる必要があった。18世紀の都市社会における社交は、「人々が『未知数』であるという認識に基づいた儀礼の形式によって確立されたのだ」。チェスターフィールドのような忠告は、「見知らぬ人たちが、自分たちが生活の物質的条件によって、たとえば年齢や、身分や、家柄や、経済的な状況などによって、他人に勝手に「位置づけ」られないようにするための、身を守る「マント」として機能していた、とセネットは結論づけている [セネット 95-98]。

ここでセネットが指摘したチェスターフィールドの「マント」は、興味深いことに、ルソーが「ヴェール」と呼ぶものとよく似ている。どちらもコミュニケーションにおいて、儀礼や行儀作法が果たしている機能を表現したものである。儀礼は、「見知らぬ人たちが」とともに生きる都市生活において、「直接的または個人的になる必要なしに他の人に敬意を表すこと」を可能にした [セネット、96]。したがってセネットによれば、チェスターフィールドの「マント」は「見知らぬ人たちが」たちが行き交う18世紀の都市において、自分を守るための防具であった。一方でルソーの「ヴェール」は、人々の「透明な交流」を阻害する障害であったのだ。

4. 透明なディストピア

社会学者の奥村隆は『反コミュニケーション』(2013)において、「よいコミュニケーションとは何か」を問い、その過程でルソーの「透明と障害」の問題を取り上げている。ルソーの望むような、直接的で、媒介するものをもたない、すなわち障害のない透明な交流は、たしかに、一般的によりよいコミュニケーション、望ましいコミュニケーションとして想像されるもののひとつだろう。だが奥村は、そのような「透明な交流」が実現した先にあるユートピアに、疑いの目を向けていく。

奥村の疑念はふたつある。ひとつは、「透明な交流」の実現可能性についての疑問、すなわち相手に「すべてがわかられる」コミュニケーションなど実現可能なのかという疑問である。そしてもう一つは、それが実現したときの恐怖である [奥村 31]。奥村は、仮に実現可能な場所がある

として、それが現れ得る二つの事例をあげている。

ひとつは、アメリカの作家レベッカ・ソルニット Rebecca Solnitが描き出した、災害時に立ち上がる「楽園」である。ソルニットは著書『災害ユートピア』A Paradise Built in Hell [2009(2011)]において、いくつかの大災害をテーマに、それぞれ取材や資料の分析を行うなかで、大災害において人びとは、集団パニックに陥り略奪や暴動を起こすのではなく、むしろ他人を思いやり助け合って行動していることを明らかにしている。「もし今、地獄の中にパラダイスが存在するとしたら、それは通常の秩序が一時的に停止し、ほぼすべてのシステムが機能しなくなったおかげで、私たちが自由に生き、いつもと違うやり方で行動できるからにはほかならない」[ソルニット 19]。大災害によって、人々は年齢や職業や支持政党、エスニシティなどの社会的属性を無意味にされ、みなが同様に生命の危機にさらされた「裸の人間」となる。そこでは、人々はそうではない状況では不可能な水準で語り合うことが可能となり「楽園」が出現するのだとソルニットは言う。

もう一つの場所は、カナダ出身の社会学者アーヴィング・ゴッフマン Erving Goffmanが精神病棟への1年間の参与観察によって『アサイラム』Asylums [1961(1984)]を刊行し、その中で描いた、精神病棟の入所者たちが生活する場、「アサイラム」である。精神病棟に入所する者たちは、自分の所属する社会における属性をもってやってくる。だが入所時にこれらの属性はすべて剥ぎ取られる。「入所に際しアイデンティティを失うことから、個人は、自己の通常のイメージを他人に呈示することができなくなる」[Goffman 19(23)]。私物は剥奪され、服装や髪形は強制され、呼び名は標準化される。私信の開封、定期的な身体検査や告白、すべてが監視・管理される中で、個人の自己は無力化される。他人への挨拶や、自分のペースで食事をとることも制限され、自己を表現する儀礼的基盤を失っていく。こうして患者は、演技や儀礼をすることができず（する必要がなく）、逃げ場をなくした自己を失っていくのだと言う。ゴッフマンによれば、精神病棟のような全制的施設 total institution は、入所者の市民的自己 civilian selfにとって致命的であり、入所者は被入所者らしく、つまり精神病患者らしくなっていく、市民的自己に戻ることができなくなっていく [Goffman 41-42 (49)]⁷。

『災害ユートピア』や『アサイラム』が描き出したこのようなコミュニケーションの様態を、奥村は、ルソー的な「障害」が剥ぎ取られた「透明なユートピア」のひとつの在り方であるとみる。「ヴェール」を剥ぎ取ったコミュニケーションは、ルソーにとってユートピアであるが、その一方で、ゴッフマンや奥村から見ればディストピアであ

る。奥村は、ルソー的な「透明なユートピア」の地点からコミュニケーションにおける演技や儀式を批判することは重要であると念を押したうえで、次のように述べる。

コミュニケーションから演技や儀礼を完全に剥ぎ取った「透明なディストピア」を想像するとき、人間の尊厳のために、演技や儀礼をむしろ擁護することが求められる。その演技や儀礼の秩序こそがそこからはみ出た人々を「透明なディストピア」に追放する暴力性をもつだけけれど、それでもなお、演技や儀礼という人間の尊厳の「基盤」をコミュニケーションから手放してはならないのではないか。[奥村、153]

社会的属性は人々の率直で深いコミュニケーションを阻害しているのだから、それを剥ぎ取り、演技や偽りなく、他者と「裸の人間」として対等に出会うことができれば、たしかにそれは素晴らしい体験となるだろう [奥村、152]。だが、その実現が仮に可能であるとしても、それが実現される条件は、なんと厳しく過酷なものだろうか。社会的属性が意味をなさなくなるほどの大災害が人々を襲うか、もしくは、市民的自己に戻ることができなくなるほどに個人が儀礼的基盤を奪われるか、そのどちらかなのだ。

5. おわりに — 『エミール』における教師と生徒—

奥村は「透明な交流」を目指すコミュニケーションの問題性を指摘した。では教育の立場からはこの問題をどのように考えることができるだろうか。最後にこの点に言及しておきたい。

「ありのままでよい」ものとしてのまなざしを子どもに向けるとき、ルソーは、「透明な交流」への願望を子どもに託し、教育の中で実現しようとしている。都市部の大人たちはすでに「魂と魂の交流」を捨てており、もはや人々は、演技や儀礼といった「ヴェール」を介したコミュニケーションしか成し得ない。しかし、生まれながらによいものであり、いまだ悪に染まっていない子どもであれば別である。子どもを墮落した都市部から切り離し、「ヴェール」のない素朴で小規模な田舎で育てることを提案するとき、ルソーは、自分では叶えられなかった「透明な交流」への願望を、教育の中で実現しようと試みているようにみえる。だが、この願望が行き着く先はどこだろうか。大人から「ありのままでよい」ものとしてしか見られない子どもの自己は、ゴッフマンや奥村が指摘するように、逃げ場をなくしてしまうのではないだろうか。

たとえば『エミール』には次のような一節がある。

生徒がいつも自分が主人だと思っていながら、いつもあなたが主人であるようにするがいい。見かけはあくまで自由に見える隷属状態ほど完全な隷属状態はない。こうすれば意志そのものさえとりこにすることができる。なんにも知らず、なんにもできず、なんにも見分けられない哀れな子どもは、あなたの意のままになるのではないか。

[……] すべてあなたの手に握られていながら、かれはそれに気がつかないでいるのではないか。もちろん、かれは自分が望むことしかしないだろう。しかし、あなたがさせたいと思っていることしか望まないだろう。

[OCIV、362-363 (190-192)]

このとき子どもは自由に振舞っているように見えて、実際には教師に管理された環境で、いわば手のうちで踊っている状態だ⁸。『学問芸術論』で他者との儀礼的な社交を批判したルソーが、子どもとの教育関係においては誠実とは言い難いコミュニケーションを提案していることになる。これをどのように考えるべきだろうか。今後の課題としたい⁹。

付記：本研究はJSPS 科研費22K02617の助成を受けたものです。

注

- 1 教育学研究へのアリエスの影響を分析した先行研究は多い。主なものとして、森田 1978、1986、今井 1991、Cunningham 1995、Heywood 2010、児玉 2010 など。
- 2 とくに民主主義社会の担い手としての子どもという視点が強調されているものに、梅根 1971、吉沢ほか 1978などがある。
- 3 井田によれば、13人の応募者のうち肯定論を選んだのが圧倒的多数であったが、それはこの懸賞論文が、事実上、学芸を保護する国王などの権力者やアカデミーという学術団体に対する称賛の弁論を応募者に要求するものであったためである [井田 2010]。
- 4 この「透明と障害」というテーマについては、ほかにStarobinski 1989、2012、作田 2010などが詳しい。
- 5 『エミール』における寓話の評価に関しては、Lewis 2012など。
- 6 セネットによれば、飢饉や戦争による移住ではなく、また家族単位の大移住でもない点が、当時のロンドンとパリの人口増加の特徴である [セネット、80-81]。
- 7 ゴッフマン自身は、外部世界に復帰することがあれば、被収容者はいくつかの役割を再度確立することができると言う。ただしその場合でも、喪失の苦い経験とともに、教育や職業などキャリアの向上、異性との交際、子どもの養育などにあたることができないため、完全に埋め合わせることは難しいと考えている

[Goffman 14(17)].

- 8 『エミール』におけるこのような教師と生徒の関係性や、教師がとった手段については、次の研究が詳しい。梅本 1981、吉岡 2009、中川 2002、岡田 2002など。
- 9 『エミール』における「教師の手のうちで踊っている自由な子ども」のイメージとその問題性は、現在の教師と生徒の関係性においても考えるべき問題かもしれない。たとえば子どもの「意欲」を重視する教育を想像してみよう。「意欲」や「態度」は、「新学力」観を打ち出した臨時教育審議会（設置法公布 1984、最終答申 1987）以降の重要な教育政策上のキーワードである。2006年の改正教育基本法第6条2項には、次のように「意欲」という言葉が登場する。「〔学校教育は〕教育を受ける者が、学校生活を営む上で必要な規律を重んずるとともに、自ら進んで学習に取り組む意欲を高めることを重視して行われなければならない」(括弧〔〕は筆者による)。また学習指導要領にも、「学習意欲」や「読書意欲」などの「〇〇意欲」をはじめとして、「意欲を育てる」、「意欲的に取り組まない生徒の指導を工夫する」など、教師の働きかけを通じて、子どもに学びへの意欲を求める表現が多く登場する。これらは、どんな動機やきっかけ、手段を使っても、結果的に子どもが学習に取り組めばよい、と言っているのではない。子どもには意欲的に、すなわち大人に言われなくても、自ら進んで、学びたいという積極的な意志をもって学習に取り組むことが求められている。ここには、子どもには「よく」あるだけでなく、「ありのまま」でしかも「よく」あることを求めるような教育観が表れている。大人と子どもの透明な交流を目指しているとも言えそうなこの教育観の検討も今後の課題である。

参考・引用文献

ルソーのテキストはプレイヤード版を用い、引用の際はOCと略記する。

Rousseau, J.-J. 1964 [初版 1750], *DISCOURS SUR LES SCIENCES ET LES ARTS*, Oeuvres Complètes III, Pléiade, Paris. (山路昭訳 1978 『ルソー全集4』白水社。前川貞次訳 1968 『学問芸術論』岩波文庫。)

—— 1969 [初版 1762], *EMILE OU DE L'ÉDUCATION*, Oeuvres Complètes IV, Pléiade, Paris 1969. (樋口謹一訳 1980 「エミール (上)」『ルソー全集6』、「エミール (下)」『ルソー全集7』白水社)

Ariès, Philippe 1960, *L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Régime*, Editions du Seuil. (杉山光信、杉山恵美子訳 1980 『〈子供〉の誕生 アンシャンレージュム期の子供と家族生活』みすず書房)

チェスターフィールド、フィリップ著 竹内均訳 2016 (初出 1988) 『わが息子よ、君はどう生きるか』三笠書房。

Cunningham, Hugh 1995, *Children and childhood in Western Society Since 1500*, Pearson Education Limited.

Goffman, Erving 2022 [初版 1961], *Asylums: Essays on the social situation of mental patients and other inmates*, penguin classics. (石黒毅訳 1984 『アサイラム 施設被収容者の日常世界 (ゴッフマンの社会学3)』誠信書

房)

今井康夫 1991 「教育学批判の系譜」『近代教育思想を読み直す』新曜社。

小玉亮子 2010 「〈教育と家族〉研究の転換—近代的孩子観・近代家族・近代教育の再考を軸として—」『家族社会学研究』22巻2号、日本家族社会学会、pp.154-164

Lewis, Tyson E. 2012, *Rousseau and the Fable: Rethinking the Fabulous Nature of Educational Philosophy*, Educational Theory, Vol.62, 3, pp.287-304.

森田伸子 1978 「近代的孩子観の形成と『エミール』」『教育学研究』第45巻第4号、日本教育学会。

——1986 『子どもの時代 —『エミール』のパラドックス—』新曜社。

中川久定 2002 『転倒の島 —18世紀フランス文学史の諸断面—』岩波書店。(初出 1990 「『エミール』とルソー」宇沢弘文ほか編『岩波講座 転換期における人間 (別巻 教育の課題)』岩波書店)

Oelkers, Jürgen 2002, *Rousseau and the image of 'modern education'*, Journal of Curriculum Studies, Volume 34, 6, pp.679-698.

岡田敬司 2002 『教育愛について —かかわりの教育学Ⅲ』ミネルヴァ書房。(初出 1993 「『エミール』における教師の術策について」『教育学研究』第60巻 (4)、日本教育学会)

奥村隆 2002 「社会をはぎ取られた地点 —「無媒介性の夢」をめぐるノート—」『社会学評論』52巻、日本社会学会、pp.486-503。

——2013 『反コミュニケーション (現代社会学ライブラリー11)』弘文堂。

Heywood, Colin 2010, *Centuries of Childhood: An Anniversary—and an Epitaph?*, "Journal of the History of Childhood and Youth", Vol3, No3, 2010, pp. 341-365.

井田尚 2010 「『学問芸術論』—思想家ルソーの原点—」桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』世界思想社。

作田啓一 2010 『ルソー 市民と個人』白水社。(初出 1970 「ルソーの集団観」桑原武夫 編『ルソー論集』岩波書店)

リチャード・セネット、北山克彦・高階悟訳『公共性の喪失』晶文社、1991。

レベッカ・ソルニット、高月園子 訳『定本 災害ユートピア』亜紀書房、2020。(初版 2011)

Starobinski, Jean 1971, *JEAN-JAQUES ROUSSEAU: la transparence et l'obstacle*, Gallimard. (山路昭訳『ルソー 透明と障害』みすず書房、1993。初出は『透明と障害 ルソーの世界』、1973)

—— 1989, *LE REMÈDE DANS LE MAL: Critique et légitimation de l'artifice à l'âge des Lumières*, Gallimard. (小池健男・川那辺保明訳 1993 『病のうちなる治療薬 啓蒙の時代の人為に対する批判と正当化』法政大学出版会)

—— 2012, *ACCUSER ET SÉDUIRE: Essai sur Jean-Jaques Rousseau*, Gallimard.

梅本洋 1981 「教育論における状況設定について —ルソー『エミール』を中心に—」『教育哲学研究』教育哲学会第44巻。

梅根悟 1971 『ルソー「エミール」入門』明治図書。

吉岡知哉 2009 「エミールとそら豆」『思想』岩波書店、

pp.116-131.

吉沢昇, 為本六花治, 堀尾輝久 1978『ルソーエミール入門』
有斐閣.